ISSN 2189-8731

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.77　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2019 年 3 月

主な記事

島嶼研究のジレンマ（坂巻祥孝）　p1
国内客員研究員フィールドレポート　p3
「科学と芸術が生まれる場–豊かな自然、豊かな心」（西本希呼）
学生奮闘記 1「無いものを嘆かない」（岩永響希）　p4
学生奮闘記 2「離島の生き物を追い求めて」（山村秀雄）　P5
フィールドこぼれ話「そこは宝の山だった」（高宮広土）　P17
連載　とうがらしに旅して
第十八回（最終回）　「酒と唐辛子の関係（三）ヤシ酒―カンボジア編―」
（山本宗立）　p18

島嶼研究のジレンマ

出版広報部　部会長・兼務教員(農学部)　坂巻祥孝

島嶼研究では、個々の島ごとに環境が固有で地理条件も異なり、さらに海に分断されて遺伝集団が隔離されるため、そこにすむ生物も固有の種や亜種になりやすい。そのため、生物の固有性や生物多様性の研究のために島に向かうことは、研究者にとって、「冒険」や「宝探し」という言葉を当てたいようなワクワク感があることが大きな魅力である。このことは、その島の住民や文化の研究をする場合でも、同様かもしれない。

私が昆虫学者なためか、このような印象が強く、20 年前に多島圏研究センターの兼務教員となった以降は、ミクロネシア連邦や南西諸島奄美群島、そして、国内の無人島、などの島への調査に参加して、新種昆虫の発見、固有性・多様性の実証、作物加害生物の特定など、多数の発見的な研究をさせていただいてきた。代表的なものとして以下の 4 つの実績があげられる。

- ミクロネシア連邦ヤップ島ではタロイモの病気を線虫被害と初報告
- 宇治群島では、未記載のゴキブリを発見（図 1）
- 奄美群島喜界島ではかんきつ樹を加害するカミキリムシに対する生物的防除法による広域防除実験
- 奄美大島では小蛾類のキバガ上科というグループを多数記録して分布種を倍増させた

しかし、これまで成果を出した後でも、釈然としないことがあった。それは多くの研究成果がそれぞれの島に固有な事象のため、実験や事例の反復が取れない、または、再現性に乏しいことである。よって、その成果を査読の整った学術誌に論文投稿することは難しい。ヤップ島のタロイモの線虫を発見した際は、この被害が限られた圃場でしか起こっておらず、類似な例が他に見つかっていない。また、喜界島のかんきつ樹のカミキリムシの広域防除例では、25ha の集落一つが丸々1 処理区なので、これに対応する無処理区や、反復をつくることができないため、論文にしようとすると、せっかくの成功は「一集落での一例報告」としか表現できない。

同様のカミキリ被害は徳之島でも出ているため、現在再現試験を試みている(図 2)。しかし、両島の環境は異なり(例:ハブが生息するかしないか)、また、対象害虫となるカミキリも亜種が異なり、遺伝的には明確に異なる。

自然科学では、「発見探索的」な研究と「論理実証的」な研究がある。前者は時に一例報告もありうるが、後者は事象の証明のために統計的な裏付けが要求される。統計的な裏付けのためには、通常空間的な繰り返し、いわゆる反復が必要である。これができないなら時間的な繰り返し、いわゆる「再現」が必要である。しかし、島ごとに異なる「固有」な環境の反復を取るのは困難な場合がある。また、再現も、いつでもできるわけではない。

論理実証的な多くの研究において、一回限りの実験や調査で得られた結果は、統計学的には偶然や誤りである可能性を含むので、再現実験や再調査の重要性が説かれている。しかし、実際にはその後の再現実験や再調査が行われることは少ないように思われる。これは最初に事象や法則を見つけた研究者がそれを報告するためのインセンティブ(動機付け)に対して、再現実験や再調査を行う研究者のインセンティブが低いことに起因するかもしれない。再現実験や再調査を行う費用(コスト)に対して、それを発表するインセンティブが小さいのだ。「やっぱり、その通りでした。」という論文では書くための「ワクワク感」が小さいのかもしれない。あるいは離島で再調査する費用が高すぎるのかもしれない。

前述した私の研究例の一つで、奄美大島で未記録あるいは未記載の昆虫(小蛾類キバガ上科)を多数見つけ、同島のこの昆虫群の種数を 2 倍以上となる 90 種に増やしたものがある。しかし、仮にもう一度採集に出かけて行って採集できたとしても、初記録でもないので、それだけで学会誌に報告する気にはならない。

島嶼における事象を取り扱う場合、反復をとったり、再現したりが困難という高い固有性ゆえのジレンマがあり、さらに、再現調査のインセンティブ低下のジレンマがある。結果的に、島嶼における研究は「一例報告」や「仮説を提案したもの勝ち」的な報告になりかねない。「目新しい事実」からは報告書も書きやすく、それについて評価もされやすい。時限プロジェクトなどで短期的な研究業績の数のみで評価をされる場合、「目新しい事実を書き連ねる」方が容易に報告書を作成でき、評価も得られ易く、研究者として適応的な戦略(生き残りやすい処世術)となるのである。このような考えは私自身の研究内容を振り返っているため自然誌分野的な見方に偏っているかもしれないが、他の分野でも島嶼研究推進上、類似の問題があるかもしれない。いずれの分野であっても、短期的な研究業績ばかりでなく、長い目で島嶼の実態を浮き彫りにすることを目指す必要もある。そのためには、時間や費用がかかって、あまりセンセーショナルではなくも過去の報告の再調査・再現実験をして「島で起こっていること」や「島に生息するもの」の情報をコツコツ積み上げ、「確からしさ」を増していくような地道な研究も評価されるべきであろう。

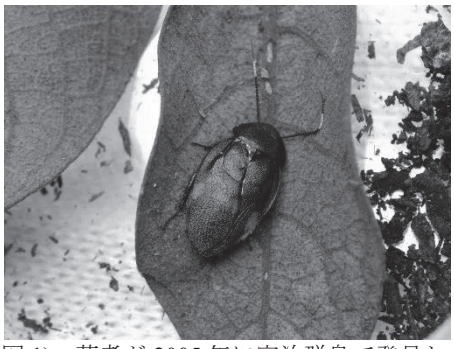


図 1)　著者が 2005 年に宇治群島で発見したルリゴキブリ属の未記載種

図 2) 徳之島町手々集落にてゴマダラカミキリの広域防除作戦を集落住民に説明している著者

国内客員研究員フィールドレポート

科学と芸術が生まれる場–豊かな自然、豊かな心

京都大学大学院人間・環境学研究科　西本希呼

私は言語学、科学社会学を切り口にこれまでマダガスカル、トンガ、イースター島、仏領ポリネシアの島々で学術調査研究を行ってきた。主な関心領域は言語多様性と生物多様性の相互の関連性である。芸術や科学といった人間の知の営みは豊な自然から生み出されるという考えに基づき、在来植物の現地語名や動植物に関わる表現や現地語の口承文芸、在来知識の記述と分析を進めている。2018 年度より同じ亜熱帯気候の島嶼地域として奄美大島が新たな調査地に加わった。2018 年 8 月の予備調査で、奄美大島を北から南まで車で移動し周り人々と交流して感じたことは、集落ごとに異なる方言や言い伝えがあるものの、私が求めている情報を持つ話者は 80 代以上のごく限られた年齢層である。これまでの島々でのように、対面調査による一次資料を集めるのは困難である。そこで、図書館があり文献資料へのアクセスがたやすく、同時に比較的自然が残る古仁屋を調査拠点とし、寿老園勤務の女性の協力のもと、古仁屋での調査を開始した。まずは、これまでのオセアニア諸国での私の調査内容を知ってもらい、地域住民との信頼関係を構築し、研究関心と問題意識を共有するために、2019 年 1 月 16 日に瀬戸内町のきゅら島交流会館にて、「心の歳時記–美しさが生み出す芸術と科学」と題して一般公開講座を開催した。夕方の部（子供の部）で約 30 名、夜の部（一般の部）で約 20 名の参加者が集まり、科学と芸術はどちらも「美しい」と感じる人間の美的感覚から生まれ、その美的感覚とは豊な生物多様性といった自然のなかから生まれることについて映画作成者、貝殻収集家、農業従事者、栄養士、島唄奏者を交えて議論した。今後、古仁屋を中心として、郷土館での文献資料をもとに、奄美の生物資源利用–たとえば祭事、歌、楽器、食文化、薬用利用、自然現象に関する言い伝え、自然の周期に基づいた数え方や方向認識–が現代社会に生きているか、もしくはどう変動していっているのか、通時的・共時的両側面から検討していきたい。

1 月 16 日　きゅら島交流会館にて　第 1 部子供向け講座

学生奮闘記 1

無いものを嘆かない

岩永響希（鹿児島大学大学院農学研究科）

私は半年間インドネシアに留学した。覚悟の上ではあったが、日本での快適な生活とはかけ離れていた。お湯は出ないし、停電するし、シャワーやトイレ中に水は止まる。道は穴ばかりで、落ちて大けがをしてもおかしくなかった。ドアのカギが壊れてトイレに行けないこともあったし、他の寮生が寮の入り口のカギを持って外出したばかりに、寮に入れなかったこともあった。隣の部屋に住んでいた日本人は、入寮初日の夜に部屋のカギが壊れて、3 時間かけてドアを壊すまで中に入れなかった。初日のハプニングにしてあまりに大きく、とてもかわいそうだった。研究に関しては、日本では機械を使って測定していたものを全て手作業でやらなければならず、挙句の果てには土壌が悪すぎて研究対象のイネが枯れて実験に失敗した。研究目的で留学したのにもかかわらず、何も成果を残せず帰国した。しかし、現地語の習得は頑張った。バイクタクシーのドライバーとの会話が成り立たずに、家へ帰れないと本気で焦ったことが幾度もあった。その為、少しずつ現地語で会話ができるように勉強した。また、生活や研究において、無いものを嘆くことなく、工夫しながら対処できた経験は価値あるものだったと思う。今振り返ると、日本では到底考えられない様々な面白い体験をした。

その後、大学院全学横断的教育プログラム・島嶼学教育コースの集中講義「太平洋島嶼学特論」でミクロネシアを訪れた。特にピス島では、電気、ガス、水道が通っておらず、物や設備が不足していた。しかし、無いから駄目だと諦め、島を放棄するのではなく、あるものからどうやって状況を好転させていくか、有意義な生活にしていくか、人々は常に考えていた。私も数日間の滞在ではあったが、特に不自由はしなかった。ピス島は海がたいへんきれいで、ヤシガニも食べられたし、かわいい子供たちもたくさんいた。また、住民間の人間関係が密であり、子供たちは一緒に遊び、大人たちは雑談を楽しんでいた。魅力ある島だった。

確かに島での暮らしは不自由を感じることもあるだろうが、無いものは作り出す、よそから持ってくる、他のもので代用するなどできることはたくさんあるはずだ。そして、島には島ならではの魅力があり、生活していく中で島のユニークなコミュニティや特産品など魅力を見つけていくと面白いと思う。今年の 4 月から私は社会人になるが、将来的に島での勤務が 100%起こりうるので、その際は楽しく順応できればと考えている。

無いものを嘆くのではなく、工夫して打開しよう。どこにいても、自分の生活は自分で面白くしていくことが何より大切だ。人生の主人公は自分なのだから。

インドネシアでのゴミ拾いのボランティア

ピス島の皆さんと記念撮影

学生奮闘記 2

離島の生き物を追い求めて

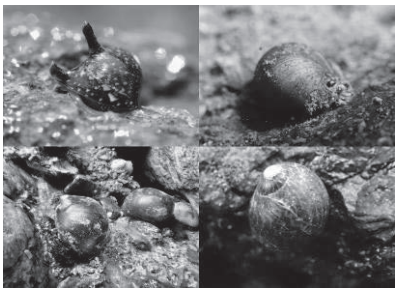
山村秀雄（鹿児島大学水産学部水産学科）

我が国は古来から「豊葦原千五百秋瑞穂国（とよあしはらのちいほあきのみずほのくに）」と呼ばれるほど、河口に繁茂するヨシ原や周辺の湿地・干潟では豊かな生態系が育まれてきました。もちろん奄美群島も多聞に漏れません。私の研究対象である巻貝のアマオブネガイ科は、世界中の熱帯から温帯にかけて、海岸域からマングローブ湿地、そして河川にまで広範囲に分布しています。加えて、奄美群島を北限とする南方系の希少種も多数生息しており、多様性溢れる奄美群島は目を見張るものがあります。しかし、河川改修や護岸工事によって“豊葦原”と形容された風景が失われた結果、アユやヨシノボリのような魚と同じ回遊性の生活史を持つことでも知られる河川性の種の生息環境は脅かされ続け、絶滅危惧に指定される種が増加しています。

アマオブネガイ科の河川性種についての生態学的知見がそもそも少ないこともあり、そのような現状を実際に見て知っておく必要があると考え、私の卒業研究は奄美大島で行うことに決定しました。現地に赴いて調査を始めてみると、カバクチカノコ、ドングリカノコ、ハナガスミカノコといった希少種が河口付近の転石の隙間に細々と生息しているのが観察できました。一方で、イシマキガイやイガカノコ、カノコガイなどに関しては、希少種の生息密度の何十倍、何百倍もの密度で奄美大島中に分布しており、限られた環境にわずかしかいない種がある反面、広範囲に同所的に多数生息する種が存在していることが分かりました。興味深いことに河川の作り出す様々な環境の違いに応じて各種の棲み分けが認められたため、河川における分布様式とその分布を決定する要因は何であるのか、というテーマのもとに現在解析を進めています。

幸いなことに私は卒業研究で奄美大島に何度も訪れましたが、思い返せばこの4年間で色々な離島に行きました。部活動の合宿で喜界島と加計呂麻島に行き、重油漂着の生態系影響評価のサンプリングで宝島に行き、生物観察会の手伝いのために徳之島に行き、と私の島生活は想像以上に充実したものとなりました。奄美以外にも沖縄の粟国島や鳩間島、小笠原諸島父島、カリブ海の島国にも海の生き物を求めて駆け回り、学生生活の思い出は文字通り島まみれで、離島で奮闘した日々と言っても過言ではないかもしれません。周りが人工物だらけの環境で育った私にとっては、自然が本当に近い存在である鹿児島という地はまさに楽園のようでした。すっかり島の虜になってしまった私は、これから先もずっと大自然を島に求めて足を運ぶことでしょう。

調査地の一つである知名瀬川



バリエーション豊かなアマオブネガイ科の貝たち
（左上以外全て絶滅危惧種）

島嶼研シンポジウム
「船で生きる人びと ―漁労・水上居民・移民船―」

平成 30 年 9 月 19 日（水）に島嶼研シンポジウム「船で生きる人びと―漁撈・水上居民・移民船―」が鹿児島大学郡元キャンパスにおいて開催されました。当日は多くの方々にご参加いただき、盛会となりました。

趣旨

おそらく人類が最初に作り出した乗り物は船であろう。水を渡る船はそもそも移動のための手段であり、ひいては漁撈あるいは運輸のための道具となった。身体の延長である高度な道具は、やがてそこに合わせて身体を規定し、制作する磁場となる。

本シンポジウムでは、漁撈生活における船の道具性から始めて、生活空間としての船が人間の社会性をどのように規定するのか、台湾・福建の事例から考えるとともに、ブラジルへの移民船の研究を通して、人を運ぶ道具としての船が、当時「西洋」世界の周縁にあった米州に渡るための、身体的変容の場すなわち「文明化」の装置として機能していたことを論じる。船によって与えられる人間の条件とは如何なるものか、複数の位相から問う場としたい。

1)　台湾東海岸における船と漁民 ―移動と権力に注目して―

西村一之
（日本女子大学人間社会学部）

本報告では、台湾東海岸に位置する港町の漁民と彼らが乗り働く漁船に注目する。日本統治期、この町には漁港が作られ、日本漁業移民が暮らすコミュニティがあった。そして、漢民族と先住民族が、日本人漁民が持つ船に乗り一緒に漁撈を行った。戦後、日本人漁民によって伝えられた漁法が、台湾漁民に広がり、それをきっかけとして沿岸漁業が盛んになる。台湾南部や離島から多くの漢民族漁民が移住し、町の人口は増え、漁船の数も増えた。1990 年代より、人手不足を背景に台湾の外から漁業労働者が入っている。現在、大陸中国、インドネシア、フィリピン、ベトナムから来る出稼ぎ者なしに、この地の漁業は成り立たない。当初は、中国人が多く働きに来ていたが、現在は大きく減少している。代わってインドネシアから来る労働者が多い。中国人のほとんどは、閩南系漢民族で、この町の漢民族と言語コミュニケーションが可能である。彼らは政治的理由により陸上での行動に自由がない。インドネシア人は、中部ジャワの漁村出身が多く、イスラム教徒である。この港町で働く台湾の外から来る漁業労働者は、みな港に係留された船で寝泊まりする生活を送っている。中には、複数のエスニックグループからなる船員によって操業が行われ、船での生活を共にしている。その姿からは、政治的に対立する台湾と中国の関係、大きな格差がある東南アジアとの経済状況をうかがうことができる。

西村一之氏

2)　定住本位社会で船に住まいつづけること ―複数の管理システムを生きる中国福建南部

の連家船漁民―

藤川美代子
（南山大学人類学研究所）

世界の遊動民と同様、中国の船上生活者もまた、国家により網の目のごとく張り巡らされた複数の管理システムが交錯する定住本位型の現代社会を生きている。本発表は福建南部の連家船漁民に注目し、定住用家屋の獲得を渇望する一方で船に住まいつづけるという一見矛盾に満ちた彼らの日常から、「遊動民的身構え」とも呼び得る生き方を描き出すことを目指す。

遊動民研究に膾炙する「自由な移動を求める遊動民／土地への囲い込みと管理を強制する国家」との図式とは裏腹に、連家船漁民が 1960 年代にはじまる「定住化」に託したのは貧困や生命の危険といった、船に住まい漁撈に従事することが不可避に生み出すと考えられる不確実性の克服と、陸上定住者と同等の未来の獲得であった。しかし、その「定住化」は、連家船漁民にとって想定外ともいえる新たな不確実性を生み出してもいる。彼ら自身は明言しないが、その最たるものが生活・生業空間を陸上に限定すること、まさに「定住化」そのものであり、多くの家庭では水陸に社会関係を構築しながら水上にも生存空間を開いておく努力がなされる。

一方、水陸にまたがる彼らの生活は、経済効果・美化を重視する都市化計画や、海洋保護・治安維持・国防を企図した国家のリスク管理政策により、家屋からの強制立ち退きや航行の厳しい制限という状況にも直面している。船に住まう連家船漁民の日常生活からは、細部で日々変化する国家の管理システムについて、どの一線を越えると自らが窮地に陥るのかを注意深く見極めながら、動きつづける船で河・海という不確実性に富んだ自然にその身を任せ、窮屈な管理社会を斜に構えて見やるという態度が導かれる。

3)　文明化の時空間としての南米行き移民船―戦間期の日本～ブラジル航海を中心に―

根川幸男
（国際日本文化研究センター）

1908 年の笠戸丸からはじまった日本からブラジルへの移民は、地球を半周するという、距離約 2 万キロ、36～70 日間にわたる長い旅であった。ブラジルへの移民船送出は、太平洋戦争による中断をはさんで、1973 年まで続いたが、戦間期の特に 1930 年代前半が全盛期であった。1933 年には、実に 24 航海、約 2 万 5000 人の日本人がブラジルに渡航したのである。

本発表では、まず、こうした移民船による日本～ブラジル間の航海を、移民船客を教育し啓蒙する「文明化の時空間」と捉え、移民たちの旅の実態について紹介する。次に、航海について記した日誌や船内新聞、古写真など、いく点かの史資料を提示しつつ、それらの「文明化の

藤川美代子氏

根川幸男氏

時空間」に生じる、次のようなブラジル行き移民船の性格と役割について明らかにしたい。①日本の庶民が集団で体験した史上最長の海の旅。②日本の庶民の文明化の時空間：服装から洋食まで「一等国民」となる教育、温帯から熱帯の自然・気候と寄港地の風俗や異文化（言語）の体験、外国人船客・現地人との接触、自己と世界観を再編するコンタクトゾーン。

こうした「文明化の時空間」としてのブラジル／南米行き移民船とその航海の実態に迫ることによって、「顔の見えるグローバルヒストリー」記述の可能性を考えてみたい。

シンポジウムでの討論風景（奄美分室と Skype）

鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「奄美群島における産業の振興 —現状・課題・展望—」

平成 31 年 2 月 2 日（土）に鹿児島大学重点領域（島嶼）シンポジウム『奄美群島における産業の振興—現状・課題・展望—』が奄美市 AiAi ひろば 2 階において開催されました。当日は多くの方々にご参加いただき、意見交換も活発になされました。

趣旨

平成 31 年度は奄美群島振興開発特別措置法の制定から 64 年が経過し、13 回目の法延長の時期を迎える。さらに、LCC の就航等、奄美群島

前田芳實学長による挨拶

への入り込み客も増加し、産業界にとっては新たなビジネスチャンスを迎えている。そこで、平成26年度～平成30年度の奄美群島振興開発計画の「振興開発の基本的方針」として重要視されている農業、水産業、紬・糖・焼酎産業、情報通信産業に着目し、奄美群島の産業の現状や課題を把握し、今後の展望について考えてみたい。

河合センター長による趣旨説明

1)　奄美群島における果樹産業の現状と未来

山本雅史

（鹿児島大学農学部）

奄美群島は北緯約27～29度に位置しており、亜熱帯気候に属する。温帯である本土との気候が大きく異なるため、その気候を活かして多様な果樹類が栽培されている。奄美群島で最も栽培の多い果樹はカンキツ類のタンカン(*Citrus tankan*)で、屋久島と並ぶ主要な産地である。カンキツ類のポンカン(*Citrus reticulate*)生産は近年減少している。熱帯果樹ではマンゴー(*Mangifera indica*)およびパッションフルーツ(*Passiflora edulis*)の栽培が盛んである。特にパッションフルーツは日本最大の産地である。また、花螺李(カラリ)と呼ばれる熱帯性スモモ(*Prunus salicina*)も栽培されている。他にも在来カンキツ(*Citrus* spp.)や熱帯果樹のアテモヤ(*Annona atemoya*)、バナナ(*Musa* spp.)、パパイヤ(*Carica papaya*)、グアバ(*Psidium guajava*)およびドラゴンフルーツ(*Hylocereus* spp.)も特産品である。今後は秋冬季温暖な気候を有効に活用し、現在の主要果樹、アボカド(*Persea americana*)等の新規果樹、固有の在来カンキツのバランスを取り、他地域では生産が困難な果樹の生産を推進することが必要である。さらに、果実を原料とした加工品の開発もこの地域の果樹産業の発達に重要である。

山本雅史氏

2)　奄美群島の漁業の今後を考える

鳥居享司

（鹿児島大学水産学部）

奄美群島の重要産業のひとつが漁業である。奄美群島では、メダイ、チビキ、キンメ、ムツなどを対象にした沿岸漁業、近海鰹一本釣り漁業、ソデイカ漁業、さらには魚類養殖（カンパチ、クロマグロ）など多様な漁業が行われている。そして、漁獲物の大半が島外（鹿児島本土、沖縄県）へ出荷されている。奄振事業などによって運賃補助が行われているものの、販売条件に不利を抱えていることに変わりはない。

こうしたなか、奄美群島は大きく変わろうとしている。LCCの就航、自衛隊の駐屯、世界遺産登録への再チャレンジに代表されるように、「大きな胃袋」をもった観光客などが多数、奄美群島を訪れるようになった。また、新しい技術を導入して鮮度保持を徹底し、量販店と直接取引を行う漁協もみられるようになった。さらに、奄美市中心部には奄美群島の魚介類をふんだんに利用した居酒屋や生産者直売店などが

複数、みられるようになった。

島外市場の開拓はもちろんであるが、膨張しつつある島内観光市場を適切に掴むことも大切である。奄美群島内には漁業のみならず、特徴的な産品を産出する農業や焼酎産業、数多くの飲食店が存在する。「オール奄美」の体制をいかに構築するのか、フロアの皆さんと考えたい。

鳥居享司氏

3)　奄美群島の基幹産業を考える―紬・糖・焼酎産業―

山本一哉
（鹿児島大学法文学部）

本報告の目的は、奄美群島の代表的な基幹産業である大島紬、糖業、黒糖焼酎産業の現状と課題を考察し、奄美経済をけん引する新しい産業の可能性を探ることにある。大島紬は、1960～80 年代前半、奄美経済を支える最も大きな産業であった。大島紬産業は多くの労働者を雇用し、所得の向上に寄与した。しかし、1980 年代後半以降、日本人の生活様式の変化等の要因により、大島紬産業は、急激に生産量を低下しており、すでに基幹産業としての地位を失っている。奄美群島の糖業は、島で生産されたさとうきびを原料として生産している。しかし、1990 年代以降、栽培農家の高齢化等の要因により、さとうきびの生産量が急激に減少しており、その結果、砂糖産業も低迷している。奄美の糖業とさとうきび栽培は、政府による糖価格調整制度（高い関税及び調整金の賦課とそれを財源とした補助金制度）によって支援・保護されている。奄美のみで生産される黒糖焼酎は、黒糖を原料とする焼酎であり、2000 年代の焼酎ブームの波に乗って急激に成長したが、近年、低迷している。焼酎の約半分は関東や関西に出荷されている。しかし、原料糖のほとんどを沖縄県や海外に依存するという問題を抱えている。将来的に奄美経済をけん引する産業として観光産業が有望であるが、紬・糖・焼酎産業と協力して観光客の拡大を図る必要がある。また、奄美経済の振興のためには、海外を含めた市場の拡大や奄美域内でのモノとカネの循環を促進することが必要である。

山本一哉氏

4)　奄美群島における情報通信基盤整備とその利活用

升屋正人
（鹿児島大学学術情報基盤センター）

日常生活に不可欠なものとなっている超高速ブロードバンド情報通信基盤は、あらゆる産業の基盤として重要な役割を担っている。特に離島においては地理的距離による格差の縮小に有効なものでもある。ところが、多額の費用が必要であることから都市部に比べて離島地域での整備は遅れた。そのような中、与論島、沖永良部島をはじめとする奄美群島においては、地域住民の積極的関与により比較的早期の整備が果たされ、地域 SNS による地域の活性化

や地域 ICT クラブにおける学び合い、そして、ヨロンマラソンのインターネットライブ中継など、さまざまな利活用が進められている。また、情報通信技術(ICT)は奄美群島の振興に寄与するものとして期待されており、例えば、鹿児島県が平成 26 年に定めた奄美群島振興開発計画では情報通信産業の振興が重点方策の一つに定められている。これらの状況を踏まえ、奄美群島における情報通信基盤の整備と利活用の具体的事例を紹介するとともに、今後の情報通信産業の振興における課題について述べる。

升屋正人氏

東　美佐夫奄美市副市長によるコメント

総合討論

高松英夫理事による閉会の辞

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第 191 回　　2018 年 11 月 12 日

喜界町南部地域の発掘調査―最近の調査成果から―

野﨑拓司
（喜界町埋蔵文化財センター）

喜界町では平成 15 年から圃（ほ）場整備事業に起因した大規模な発掘調査を継続的に実施している。島内中央部にある城（ぐす）久（く）遺跡の発掘調査からは、古代末～中世にかけて古代日本国家との関わり合いの中で交易拠点として成立した遺跡であることが分かり、全国的な注目を集めた。平成 23 年からは島内南部の手（て）久津（くづ）久（く）地区の調査を開始した。本地区は海岸段丘面に立地しており、段丘面に沿って溝・柱穴・墓などが多数出土している。ここからは 14～15 世紀代の中国産陶磁器が大量に出土しており、中世末の喜界島の様相の一端を知ることが出来る。現在整理作業中である。平成 25 年からは隣接する荒木中央地区の調査を開始した。こちらでは縄文時代後期～晩期の良好な遺跡群を検出し、遺構・遺物が多数見つかっている。本地区は現在も発掘調査中である。いずれの遺跡からも遺物が大量に得られていることから、今後の考古学研究に大きな影響を与えることが想定される。また、フロー

野﨑拓司氏

ーテーションや科学分析を継続的に実施しており、島内・島外の比較研究を進めていく予定である。今回の研究会ではこれら手久津久地区・荒木中央地区の調査成果について紹介する。

第 192 回　　2018 年 12 月 10 日

薩南諸島における在来家畜の役割と課題

中西良孝
（鹿児島大学農学部）

鹿児島県薩南諸島においては、在来家畜やその野生化種が生息し、高い生物多様性が維持されていることから、それらの家畜は学術上、極めて重要な希少動物遺伝資源とみなされている。一方、外来種も存在しており、野生化種の一部とともに農業、固有種および環境に悪影響を与えている地域がある。特に、トカラ列島においては、口之島野生化牛、トカラ馬およびトカラ山羊とその雑種が生息しており、前二者は人為的管理下で保護されているが、後二者は飼育されたり、飼育放棄によって野生化したりしている。演者らはこれまで希少動物遺伝資源保存の観点から在来家畜の保護と活用に関する研究を行ってきたが、最近、家畜の種類や地域によっては野生化種が農業や環境上の問題を引き起こしていることから、飼養実態調査とともに、野生化種の生息調査も行なっている。在来家畜のうち、トカラ山羊は雑種化が進んでおり、トカラ列島以外の地域ではその雑種は“島ヤギ”と称され、飼育されている個体は主に肉または伴侶動物として利用されている。一方、奄美大島において飼育放棄された島ヤギは、ノヤギとなって農作物や希少植物の食害をもたらし、植生破壊とそれに伴う土壌浸食を惹起している。本報告では、薩南諸島の在来家畜、特に山羊の飼養実態、生息状況および問題点を紹介し、今後の課題を提起する。

中西良孝氏

第 193 回　　2019 年 1 月 15 日

なぜダニ類は昆虫以外の陸上節足動物の中で最も種数が多いのか?

島野智之
（法政大学自然科学センター）

クモガタ綱（蛛形綱）のうちダニ類だけは捕食性のほかに、寄生性、食植生、食菌性、腐食性など様々な食性を示し、体を小さくし、地球上のあらゆる環境、あるいは隙間環境にもぐりこんで生活することができる。ダニ類は、大袈裟な言いかたをすれば「この地球上はダニだらけ」なのである。しかしながら、日本に記録されているダニ類は 2000 種。そのうちヒトの血を吸うダニはわずか 1%である。自由気ままな他のダニ達は迷惑しているに違いない。

そんなダニ達は、地球上のあらゆる環境に生息している。陸上中心ではあるがダニは深海から高山までに生息している。ダニ類と昆虫類はともに、海中に生息していた節足動物の祖先が陸へ上陸し、陸上で発生したと考えられる。しかし、昆虫類は海へ再び進出することはできなかった。

世界で約 1 万種が記録されている分解者としての土壌ダニ、ササラダニ類は、多様でかつ奇妙奇天烈な姿をしている事で知られている。ササラダニ類は他のダニ類のように、素早いスピードで動くことが出来ないため、様々な防御戦略をとることによって、形態的な多様性を産みだしていると考えている。ササラダニ類を中心に島嶼調査を紹介する。他の自由気ままなダニ達についてもその奇妙な生態について触れたい。

島野智之氏

特別研究会　　2018 年 10 月 9 日

織物の展望と草木染の錬金術―現代日本の地方における新しい世代の染色家―

シャーロット・リントン
（オックスフォード大学人類学・博物館民族誌学科）

草木染、すなわち、植物の材料と天然の媒染剤（定着剤）による染色は、伝統的織物としての歴史があり、日本の地方において全国的に強力な産業となりつつある。歴史的にみれば、この染色の技術は機織りの染め糸に使われてきたのに対し、今やデザイナーたちはこの技術を国内外で流行を意識した衣類やインテリア製品、繊維製品に応用し、有害な化学着色剤に対する自然の選択肢としてプロモートしている。

奄美大島では、その多くが I ターン者や U ターン者である新しい世代の染色家たちは、島外の顧客を対象に、藍染や泥染めといった製造過程の遺産を売り込むために、有名だが経済的には苦境にある地元産の和服用布地である大島紬の真正性や歴史ある権威に寄りかかっている。同時に、草木染技術の「自然さ」とその材料成分は、環境の持続可能性と地場に基づいた真正性を支える言語的および視覚的語りに組み込まれていく。

この民族誌的プロジェクトは、主に、奄美大島龍郷町のある染色工房とその職人たちや関係者を対象に、これまで 11 カ月間実施されてきた。本研究は、経済社会的持続可能性と、知識と原材料の移転という観点からその社会的ネットワークを探る一方、島嶼研センターの関心に合わせて、考察では、地理学的に特殊な文化や環境との関わり、および地域の自然資源の開発利用に焦点を当てる。

シャーロット・リントン氏

研究会で奄美分室と Skype でつないでの討論風景

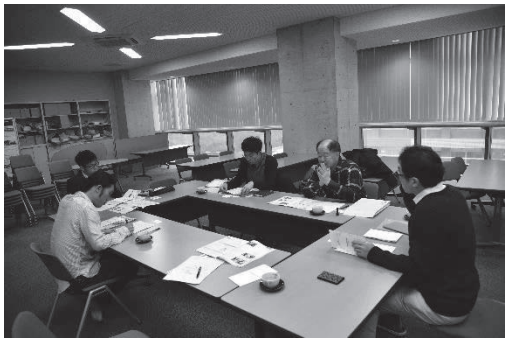
お知らせ

(1)　済州道済州学研究センター趙誠倫教授・金 Seonpil 研究員島嶼研訪問

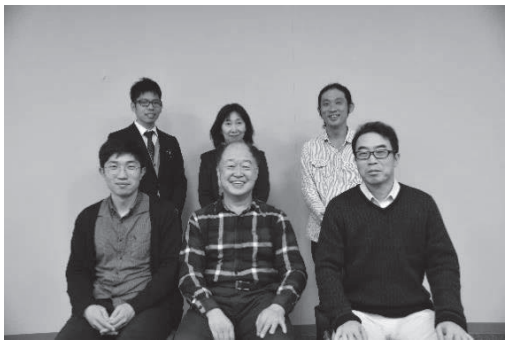
2018 年 12 月 10 日（月）に韓国済州大学校の趙誠倫教授と金 Seonpil 研究員が国際島嶼育研究センターとの学術交流協定の締結を目的として、訪問されました。趙教授は昨年度 (12 月 18 日～3 月 19 日)、当センターへの外国人客員教授として鹿児島本土や奄美大島でご研究を実施しました。今回当センターとの学術交流締結の可能性や国際学術大会の開催について意見を交わしました。国際交流の活性化という点で外国人客員の重要さを示唆する来訪でした。

趙誠倫教授

金 Seonpil 研究員



意見交換の様子



意見交換後の記念撮影

(2)　教員免許状更新講習

平成 28 年度より国際島嶼教育研究センターの教員で、教員免許状更新講習を行っています。平成 28 年度は奄美市、29 年度は奄美市と徳之島天城町で開催されましたが、今年度は奄美市で集中して実施しました。日時と場所は 12 月 2 日（日）9 時～17 時、AiAi ひろばで、講習科目は「島嶼の自然と人びと」でした。講習では奄美群島やアジア太平洋における島の自然、人びとおよび文化に関する講義を行いました。41 名の参加者があり、アンケート調査によると約 95 の参賀者が「大変ためになった」と回答していました。

AiAi ひろばでの教員免許状更新講習の様子

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol. 39, No.2, 2019

Research Note

SUMB A.: International Tourists' Perceptions of Safety and Security Issues in Madang Province, PNG

～フィールドこぼれ話～

そこは宝の山だった

高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

奄美空港と赤尾木間を走っていると必ず目に入るものがある。あまみエフエム 77.7 の看板だ。この看板から東西南北に 20mほどの区域は半川遺跡として知られていた。今から 13 年前にはその看板は立っていなかった。そこで当時奄美考古学会会長であった中山清美さんらはその地点から海側に 1m×1m のトレンチを設置し発掘調査を行った。GW の間の短期間の発掘調査であった。2 点特筆される調査成果があった。まず第 5 層（最下層）から条痕文という土器が検出されたこと。この土器の検出により中山さんらは第 5 層は約 5000～6000 年前と解釈した。2 点目は第 5 層から大量の堅果類が回収されたこと。これは奄美諸島最古の堅果類となる可能性があった。私はその分析を中山さんに依頼され、そのほとんどがシイ属であった報告文を当時留学していたカナダから彼に郵送した。12 年前である。

大変残念なことに中山さんは 2016 年にお亡くなりになった。その後彼の著書『掘り出された奄美(2009)』を彼を回想しつつ読んでいると、半川遺跡を紹介している箇所があった。そこで彼は「半川遺跡出土の植物遺体は高宮が分析結果を報告している」と述べていた。「?」。そのような報告書は見たことも聞いたこともなかった。関係者に問い合わせてみると、どうやら彼は報告書を出すつもりでこの箇所を書いたようだ。つまり、報告書は出ていない。丁度その頃、中山さんの追悼論文集を刊行することが決まった。私は半川遺跡の分析結果をこの論文集に掲載することにした。また『掘り出された…』では「堅果類の年代測定結果が楽しみだ」と中山さんは述べていた。そこで、第 5 層と第 4 層出土のシイ属の年代測定を行った。その結果は両試料とも 11200 年前! 中山さんの想定した年代より 2 倍ほど古くなってしまった。では、上記の「条痕文」はこの年代なのか?とすれば、琉球列島最古の土器となる。一体どのような土器だったのであろう。しかし、もう中山さんにお聞きすることはできず、肝心の「条痕文」土器は 2010 年の奄美大豪雨で行方不明になっていた。

この「条痕文」土器を理解するためには、遺跡を再発掘調査するしかなかった。今年度運良く科研費がついたが、中山さんの調査後で宝(遺物)が残っていそうな場所は例の看板の下あたりのみ。「あの看板をどうしようか。う～む。。。」頭痛の種であった。が、10 月初旬にそばを通ってみると、看板がない!!!　そう、台風 24 号でぶっ飛んでしまっていたのだ。これは奇跡的だ、と思い、また他にもいくつかの奇跡が重なり、11 月の上旬に 10 日ほど発掘調査をすることができた。1.5×1.5m のトレンチをその頃消滅していた看板の真下に設置した。発掘し始めて、翌日の午前中には 1500 年程前の土器が出土、その午後には約 4000 年前の土器が検出された。いよいよ幻の「条痕文」土器にお目にかかれるかもしれない。そうして 4 日目、発掘担当で琉球列島の土器のスペシャリストである鹿児島大学埋蔵文化財センターの新里貴之さんが「なんだこれ？」という土器が現れた。「やった、これこそ中山さんの幻の土器だ」と内心天国に舞い上がっていた。そのあたりから、堅果類も確認されるようになった。普通、堅果類などの植物の種実はあまりにも小さく、発掘中に肉眼で確認することはまずない。「これは *Science* 級の発見だ」と調査後の車の中で、調査員らと熱く語り始めていた。しかし、翌日の調査で奈落の底に落とされた。

「条痕文」の下から、琉球列島最古の土器である爪形文が検出されたのだ。これは約 6500～7000 年前の土器と言われている。その後の調査では爪形文より古い土器は見つけられなかった。が、今回の成果は琉球列島的には大発見である。その大発見をした場所であるが、1 月初旬には再びあまみエフエムの看板が立てられていた。台風対策のためであろうか、今度はより頑丈なコンクリートの土台とともに。つまり、今回の発掘は 10 月から 12 月の短期間のみ実施が可能であった。このチャンスを逃すと自分の生きている間には調査はできなかった。大発見に加えて、奇跡的な調査であった。

『とうがらしに旅して』

第十八回（最終回）「酒と唐辛子の関係（三）ヤシ酒―カンボジア編―」

私が初めてヤシ酒（醸造酒に限る）を飲んだのはカンボジアだった。同行者からカンボジアではヤシ酒が飲める、と聞いており、移動中の車からオウギヤシ（*Borassus flabellifer*、パルミラヤシとも）を見るたびに、早く飲んでみたいと思っていた。すると、タケオ州からコンポンスプー州へ向かう道沿いに、ヤシ酒を売っている店が点々と並んでいるではないか！　残念ながら 1 軒目は売り切れだったが、2 軒目には人だかりが。やった。ついにありつける。カンボジアではヤシ酒をタックタナートチュー（*tek tnart chu*）と呼ぶ。お店でヤシ酒を飲んでいるおじさんたちのつまみはバッタだ。ヤシ酒に昆虫食。もうワクワクしてよだれが止まらない。ヤシ酒を飲んでいたおじさんがニコニコしながら「飲んでみろ」とグラス 1 杯おごってくれた。乳酸発酵のような匂いがし、少し酸っぱく、口にまとわりつく。ほのかに甘く、なんとも言えない香りがある。この時は純粋にヤシ酒に感動しただけで、唐辛子のことは頭になかった。しかし、このお店でヤシ酒の話を聞いたり、他の場所でヤシ酒の生産方法を調査したりしてみると、会話の中に唐辛子がぽつぽつとでてくるのだ。例えば、「特定の樹木の木片や樹皮を乾燥させてから壺に入れ、そこに樹液をいれて 2～3 時間でヤシ酒ができあがる。ヤシ酒は樹液を壺に入れてから 3～4 時間くらいしかもたないが、壺に唐辛子を一粒に入れておくと 2 日もつという話を聞いたことがある」や「ヤシ酒を 1 晩越させるために唐辛子と柑橘の果汁をまぜて置いておき、次の日に飲んだ。するとその後トイレへ行くとおしりが痛いこと痛いこと。ヤシ酒は酸っぱくなっており、柑橘の果汁も酸っぱく、唐辛子が辛いためだろう」などだ。唐辛子にヤシ酒の発酵の進行を遅らせる効果があるのか、ただの笑い話なのかはわからない。しかし、『ヤシ酒の科学』によると、スリランカでは花序の基部に穴をあけて様々な植物や食塩を混ぜたものを注入したり、花序のまわりにそのような混合物を塗布したりすることがあり、その混合物に唐辛子が使われることもあるようだ。東南アジアの大陸部でも島嶼部でも、ヤシ酒と唐辛子とには何やらあやしい関係がありそうだ。近いうちに情報をとりまとめたいと考えている。本コラムは今回で最終回。長い間唐辛子のよもやま話にお付き合いいただき、誠にありがとうございました。（山本宗立）

編集後記

奄美諸島でみかける桜は緋寒桜です。今年は 1 月半ば頃開花していました。桜をみると鹿児島に来て 1 年目のおわりの春を思い出します。2 月に奄美で満開の桜をみ、3 月末に仕事で鹿児島に渡るとそこで桜が咲いており、4 月半ばに海外出張で成田に行くとそこでも満開の桜をみました。極めつけは 5 月の GW に札幌の自宅に戻るとそこでも桜の花々が私を迎えてくれました。内心とても贅沢な人生かもしれないなと感じた春でした。（高宮広土）

島嶼研だより　No.77　平成 31 年 3 月 23 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
〒890-8580　鹿児島市郡元 1-21-24
電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197
電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
WWW http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html